

オホーツク・カムチャッカ州から極東太守府へ ロシア帝国の極東空間における行政ゲーム

アナトーリー・レムニョフ
(麻田 雅文・松里 公孝訳)

現代ロシアにおいて中央による地方の統制を容易にするために考案された公式路線、すなわち「権力のヒエラルキー」の強化、連邦管区の創設、そして州など行政単位の合併・巨大化—これらすべては、地方統治における帝国的経験への歴史家の多大な関心を喚起した。連邦管区導入という構想が現れた2000年から2001年にかけては、帝政下の総督府について再び語られるようになった。中央と地方の間での「取引」が長引く中、地方行政の特質を保持しながら首都の権力を強化する上で、総督府モデルは歴史上の良い先例になりうると思われたのだ。それと同時に、中央からの操縦が厳しくなる一方で、地方では貶められた状態への潜在的な不満が蓄積し、「国内植民地」を表象する諸概念が政治言説に定着する。こうした状況下、国の中南部から遠く離れたところにある歴史家の学術コミュニティーが現代的課題にいかに応じ、どのような歴史的経験に実践的な意義を付与しようとしているかを見る上で、ロシア極東は興味深い例である。

地方史叙述は、必ずといってよいほど中央と諸辺境の相互作用に关心を集中するが、極東の地方史叙述の特徴は、公正で平等な関係を要求するだけでなく、自地方の利益が軽視されることへの非難を送りつけるという、中央権力に対するアピールの意味もいくらか含んでいることである。他方、中央は地方の効果的な経済発展を目指していたというより、汚職病が蔓延する地方権力とビジネスの諸活動を統御・統制する能力を引き上げることに気をとられていた。ロシア極東は昔も今も安定した領域構造をしておらず、ウラジオストクは昔と同じように、極東連邦管区の首都となったハバロフスクが行政上の地位を向上させたのに嫉妬している。こうした政治行政上の「永遠の」問題の驚くような再現性と相互連関ゆえに、歴史家は、歴史的な伝統を自信をもって列挙することができる。極東の領土喪失の脅威は、以前はむべもなく突っぱねられていたが、こんにちでは歴史叙述の主要な動機になったといつてもよい。歴史的・現代的諸事象の地方化は、ロシアと外国の歴史家や政治学者の主な関心的となっている。ただ、この点では極東の研究者たちは、先走った予測をすることには比較的慎重なのだが。スティーヴン・コトキンとデヴィッド・ウルフが編集した論文集『アジアの中にロシアを再発見する：シベリアとロシア極東』(1995) (1) を書評した際、サハリンの専門家たちは、論文集の著者たちは「ロシアの発展における遠心的傾向の意義を明らかに過大評価した」と述べて、自らの愛国的な楽観主義を披露した。彼らによれば、いやしくもロシア史を学んだ者は「ロシア史においては、いろいろな間隔で（主に短くだが）分裂と弱体化の時代を見てとれるし、それらに必ずとつ

てかわって、統一と強化、そして西洋文明では考えられないような中央集権の時代がやってくるのを知っている。このことを理解できない者は永遠にロシアを理解することができない」(2) のだ。

歴史的な視点からなされる極東の地方研究においては、帝政期のロシア国家の経験が非常に重要視されている。あれこれの形で、ロシア国家への極東の併合と同化（行政的なものも含めて）、極東のロシア国家における役割と位置という問題が、研究者の大半を統一しているのだ。伝統的に、そして依然として重要とされているのは、移民と人口移入というテーマである。これは、こんにちのロシアで極東の人口減少が著しく、また中国人の労働力と商業の地理的拡大の脅威がとりざたされていることから、アクチュアルなテーマとなった。これらと並んで、国家諸機関、行政区画分け、帝政期の政治家の伝記、地方政策における宗教ファクター、とりわけロシア正教の役割の歴史が、研究の新潮流となった。研究者の関心という振り子は、政治の変化（ブーチンの再集権化）の後を追って反対側にゆれ、もはや極東史の主役も専制権力と闘う地方の闘士たちではなく、帝国の建設者たちとなった。極東史研究の成果を公に認めるなどを要求する概説の中で、ロシア科学アカデミー極東支部の歴史・考古学・民族学研究所の副所長である Л.И. ガリヤモヴァは、次のように述べている。「20世紀における諸帝国と強大国の没落がもたらしたグローバルな諸帰結は、国家一般とりわけロシア国家の諸問題を新たな視点から吟味し、諸帝国や国民国家の安定性という問題を考察し、国家の（特にロシアの）国家構造、ロシアの領域的・民族的・宗教政策の最適形態を問い合わせることを不可避にした」(3)。このことを物語るのが極東ロシア国立歴史文書館（РГИА ДВ）による史料研究のテーマ設定についての手引書である(4)。トムスクからウラジオストクへの文書の移転が、国政史の研究に堅固な史料的基礎を与えたことは疑いを容れない。この文書館の出版物のリストには、「文書館報知」(Известия РГИА ДВ) のほかに『諸法令にみるロシア極東（1856-1895年）』全5巻(5)、『ロシア極東：統治システムの歴史から：プリアムール総督府創立115周年記念』(6)、『皇太子の旅：文書と資料』(7)、『総督たちの視察』(8)、『極東における自由港制度』(9)、『ロシア極東の東洋学の歴史から：1899-1937年』(10)、『ロシア極東における朝鮮人たち（19世紀後半から20世紀初頭）』(11)、またそのほか、市町村史、税関・国境管理、地域の同化におけるロシア正教会の役割などについての一連の史料集が含まれている。しかしながら極東の歴史家たちは、面白い史料を「学術利用に付し」（学位論文の序の決まり文句）ながら、その概念的な練り上げにおいては、ほんの初期段階にある。特徴的なことに、上記の資料集の大半は解題さえ含んでいない。新しい方法論・アプローチは、帝国史についてすでに盛んに使われている帝国論を含めて、まだ用いられていない。ここ20年で国際的な学術交流が目に見えて増えたにもかかわらず、この有様なのである。ロシア極東史は郷土史研究の枠にとどまって、ローカルな地方史として閉じこもり、アジア太平洋地域の外国人の同僚との学術対話には積極的に参加するのに、ロシアの学術の中心には近づかない。こうした状況で、新しい研究コンセプトの伝播は、西からではなく主に東からなされている。

他方、極東の歴史研究と、いわゆる「ロシアの現状が突きつけるチャレンジ」の地方的な現れの間の連関は、よりはつきりと見てとれる。地方の史学史における諸変化の象徴的な始まりとなったのは、ロシア極東にとってはなじみのある人物、東シベリア総督で極東併合の立役者であったニコライ・ムラヴィヨフ・アムールスキイ伯の1991年における（没地パリから遺骸を移しての）改葬と、翌年に行われた彼の銅像の復旧だった（12）。その時ハバロフスクの郷土史家たちが歴史の闇の中から沿アムール総督たちの伝記を引き出していくと、やがて帝政期の復権を願う方向での、総督や県知事に関する何本かの論文、概説、そして本さえもが出された（13）。こうした転換の制度的な反映が「グロデコフ・セミナー」や、沿アムール総督府や極東の州や都市の創立記念日、そのほか地域で重要な事件の日付や帝政期の指導者、ロシア極東の地理上の「発見者たち」を記念する諸コンフェレンスであった。極東の歴史家は、極東におけるロシア帝国の外交政策を研究する上での自分のオリジナルな視角に自信を持っており、辺境における国家官僚が、帝国の国境地帯の実態をよく知っていたということと、極東の総督、知事、その同志たちが自立的な立場と固有の見解を持っていたことを強調するのである。極東の地をロシアにつなぎとめて防衛力を強化する重要な要素として、帝政期の地方指導者たちは、ロシアの農民やコサックの入植が、中国人移民の「平和的侵略」に対峙し、不可避とみなされていた将来の戦争における重要な人的資源になるとを考えていた。不法な移住や密輸との闘い、国境と天然資源の防衛、地方の特別の経済体制（自由港制）（14）が前面に出た。これらの問題は、長い歴史のスパンで、こんにちの政治家や官僚をも不安にさせている問題なのである。さらに極東をロシアにつなぎとめるもうひとつの重要な手段が、鉄道や電信網を敷設し、艦隊や商船団を発展させることでコミュニケーションの遠隔性を軽減することだった。極東の人口不足や貴族階級の組織の欠如、ブルジョワジーの諸制度の発達の遅れが、国家権力の主導的な地位、極東の商工業がロシア中央の実業家や外資の意のままとなっていたこととあいまって、地域共同体を形成する制度としての地方自治機関の発生の遅れと弱さの原因となった。それと同時に、都市や農村の自治機関は通常「上から」徐々に導入されて帝権の支配下に置かれ、一連の「地方的必要」を充足する任務を、財政赤字に苦しむ国家の手から引き受けることに主に利用されることになった（15）。時がたつにつれ、市議会や取引所委員会、その他の公共組織や自治機関が、地方出版物とならんと、地元の利益の重要な代弁者となっていました。

極東の多くの学者によって進められてきた極東における帝国政策史の研究は、私自身の研究によって提起されたものも含め（16）、いくつかの観察結果を述べ、ロシア極東における帝国政策の基本的傾向について解釈することを許す程度の蓄積に達している。

まず、新しい歴史の物語の主人公たちは、帝国の破壊者ではなく、地域の建設者であり防衛者である。ロシア極東の「開発・同化」という伝統的テーマにおいては、ロシア人によるものであれ外国人によるものであれ移民が主要なテーマであり続いている。しかもこのテーマは、「喪失の危機にあるロシアの領土」という過剰に政治化し

た言説に組み込まれている。極東へのロシア人の移住に配慮し、外国の経済的膨張や自然発生的な中国人の移住に対抗した歴史上の人物は、歴史家たちの目にとまって主要な登場人物となるのである。極東の研究者たちは地方の肯定的なイメージや住民のアイデンティティを探すのに熱心である。極東の領土喪失シンドロームと、国の中から忘却されているというマイナス・イメージは、たとえそれが流刑囚に担われたとはいえ、極東の過去の「栄光」についての歴史的な記憶によって相殺されるのである(17)。このイメージ上のコンビネーションにおいては、極東の天然資源を活用しようとする意欲が欠けていることへの伝統的な嘆き、ロシアの未来の世代のための巨大な資源備蓄があることへの自信、ロシア人によるものであれ、外国人によるものであれ、これら資源を略奪的に費消されることを許さない防衛意識が、何の矛盾もなく結びついている。このイメージの主な要素は、現状への自信喪失、過去への誇り、そして未来への希望というものである。

ロシア極東史の同時代における研究は、帝国統治において積極的局面と消極的局面が周期的に交替してきたことを反映している。19世紀の間に中央部からの遠隔性の中で形成されたロシアのリージョンとしての極東は、経済と政治行政の両面において、開発の見通しの不明瞭な、入植の遅れた地域としてイメージされた。ロシア政府は、カフカースや中央アジアにあったような、行政地図を構築する際に参照できるような古くからの政治的境界線や、民族的な境界線すらもこの地に関してはもっていかなかった。このような条件のもとで、総督府の設立は行政的な法律行為というだけではなく、「ロシア極東」という歴史的・地理的な空間、つまり「もう一つの」ロシアを形成することであった。そしてこの新地名は、境界線引きとアイデンティティ、しかも自らの特徴を際立たせることを自己目的とした線引きとアイデンティティによって、その意味づけがなされてゆくのである。長い間、ロシア極東は、その中心と周縁が不明瞭という点で問題地域であった。行政的な境界は、事実上、新しい地理を作った。総督や県知事は、帝国の中央からいわば「白地図」を受け取って、その上に新しい地理を描く人々であった。彼らは帝国の新領土の「最初の開拓者」で「建設者」であるだけでなく、その「地理学者」になった。この「地理学者」の任務は、土地や諸種族の描写や研究を組織することであり、その中で「異空間」に名前を付け、境界線を引き、行政中心地を選び、人々を入植させたのである。また、地名を決め、教会を建設し、地方にとって重要な歴史的人物を選定・伝説化することを通じて、象徴的な意味でも極東を同化し、たとえ遠くとも「母なるロシアの土地」に変えたのである。

まず歴史家の視野に入ったのは総督(プリアムール総督全員が「尊敬に値する人物」であったことは極東にとって幸運だった、とまで歴史家 H.I. ドゥビニナは言い切る)と知事たちであった。鮮明でもなく、一貫してもいなかった政府の一般方針を地方において実現することを求められた中央の代理人であると同時に、地域の効率的発展に責任を負うという総督の使命の二重性は、彼らを複雑で両義的な状況に置いた。地方の法的独自性(その背景には政治的な分離主義があると疑われていたのだが)は、行政的集権化や画一化の望ましいあり方を阻んでいた。中央の特使であるはずの総督・

知事が不可避的に「地域に同化」されてしまい、地方利益のロビイストになってしまふことを中央政府が恐れたので、彼らは短期間で更迭されるのが常であった。それとともに、中央から地方へ行政権限が移譲されたことは、帝国空間が巨大であることから生ずる現実的要請を中央政府が認めたことにほかならず、地方当局上層部の要求への妥協であった。これら地方上層部は、皇帝個人とその「個人的代理人」(つまり、彼ら自身)によって担保された、強力で、能動的で、自立的な権力を地方に創出する必要性を主張していたのである。総督たちは地域の発展計画を提案しながら、大臣たちに、もっと明確で確固とした政策をとるよう求めた。

当初、極東の行政区画編成は、経済的に見て合理的な地域編成よりも、軍事・政治的な動機に基づいてなされた。政府は、総督府・州など様々なレベルの行政上の中心地をどこに置くか決めるのに一定の困難を経験した。それは、経済発展の見通しが不確かであったからであり、極東をめぐる軍事・経済政策が大陸主義と海洋主義のいずれかをとるのかについての論争が長く続いていたからである。増大しつつある帝国的課題は、極東イメージを徐々に「具体化」していたが、特に19世紀中頃から、ロシアに極東を「開いた」ニコライ・ムラヴィヨフ・アムールスキイを皮切りに、極東を社会の関心の重大な対象に変えた。帝国は、極東辺境にロシア人を入植させ、ロシア化し、そしてコサック、農民、流刑者を使った殖民によりロシア国家に永遠に繋ぎ止めるために、時間を稼ごうとした。帝国にとっては伝統的な植民政策のメカニズムの中に、「地域をロシアにする」、「大ロシア民族」構想をここで実現する(18)、「ロシアの臣民性」を植え付けるという、民族的なモチーフが混入した。しかし極東においては、中国人や朝鮮人の移民の増大という帝国にとっての新たな脅威が現れ、「黄禍」というイデオロギー的概念が生まれた。「極東人(дальневосточники)」という地域のアイデンティティが、ダイナミックに、またゆっくりと形成されつつあった地域社会の条件下では、たとえば「シベリア人」とは違って、昔も今も、彼らが、政治的忠誠心はもとより経済や社会文化面での競合能力においてさえ、中央に深刻な懸念を起こすようなことはなかった。

政府関係者や社会の各層における極東への熱中は、虚無感や、ほかのもっと有望に見えた方面の探索に定期的にとて代わられた。極東政策への関心の高揚期(18世紀と19世紀の転換点、1840年代末から1850年代、1870年代と1880年代の境、1890年代末から1905年、1908-1911年)に交替して、ロシア極東、特にその北部の利益を完全に忘却するにまで至った関心の低下期が到来した。アムール川地域とウスリ一川地域の併合は、極東の開拓線を、イルクーツク-ヤクツーク-オホーツク-ペトロパヴロフスクという北路から、イルクーツク-チタ-ブラゴヴェシチエンスク-ニコラエフスク-ハバロフスク-ウラジオストクという南路へと移動させ、そのことが地域の領域編成を変える誘因となった。19世紀の70年代から80年代にかけて清国との関係が紛糾したため、ペテルブルク政府は、1884年に沿アムール総督府を導入した。しかし実際には、ツアリズムの外交的な野心を満たすために地域の利益を無視する昔のままの政治が続けられていた。特にそのことがはっきり示されたのは中東鉄

道（ハルビン－旅順－大連）の建設においてである。1903年には旅順に拠点を置く極東太守府が創設されて、沿アムール地方はその管轄下に入れられ、資源配分の点では飛び地とされてしまうという脅威を経験した。帝国は、例のごとく、国境や勢力圏の拡大という国家の課題に目を向けて、国内領土を跨ぎ越してしまった。極東政策の最高潮は19世紀と20世紀の端境期で、日本との戦争でロシア帝国が敗北した1905年に終わった。このことが対外拡張の時代を終わらせ、政府と社会にロシア極東の内政問題へ目を向けさせた。

行政区画分けの立案と「首都の最新モデルによる」改造が次々と大急ぎで行われ、同時代人が記したように、地理の教科書も間に合わないほどだった（19）。ザバイカル州を沿アムール総督府の管轄に組み込むのは経済地理や行政地理の観点からは不自然なものに見えた。しかしザバイカルは、ロシア極東の生存のためのオールタナティヴがない間は、その人口基地・食糧基地として必要だった。オールタナティヴとは、（インド洋周航路も含む）欧露からの農民の入植、沿アムールと沿海州の農業生産の増大、満洲やモンゴルからの食糧供給などである。沿アムール総督府へのヤクーツク州の編入も提案された。しかし、この州の発展の展望は不鮮明だった。カムチャッカ州の創設（1909年）の遅れと、日露戦争で南半分を失ったサハリン州の知事のステータスが主に外交上の威信のために保持されたことは、かえってそのステータスを不鮮明にした。これらはすべて、明瞭な地域開発計画の欠如を物語っていた。もし1905年までの極東言説において、ロシア極東の喪失の危険性というテーマが存在していたとするなら、敗戦により、それは支配的となった。これは、日本との新たな戦争の脅威だけでなく、中国人移民やヨーロッパ、アメリカ、日本の企業家による平和的な方法での帝国辺境の占領も視野に含んでいた。

こうして、こんにちのロシアにおいては、相変わらず暴露と非難の決まり文句に支配されている比較的最近のソビエト期の経験よりも、帝政期の経験の方がより一層必要とされていることが明らかとなっただろう。ロシア極東は、現代の研究において、内政と外交上の諸問題が単一の複合体をなし、領域の保全と外からの脅威が地域政策の恒常的な構成要素となる「巨大な国境空間」として立ち現れた。現代の極東の歴史家たちは、まさにこうした視点を継承せざるを得なかつた。というのは、彼らは、現代的な政治経済上の諸困難に注意を向けることで、その歴史的なルーツに実践的な意義を付与し、通信交通において国の中核から遠く離れた地方を組織する諸問題が歴史的に相似し、繰り返されていることを描出することによって我々の想像力を著しく刺激したからである。おそらく、中央はいまだに、極東地域をロシアの資源備蓄庫とみなし、それはただ保護し防衛すべきものだとしか考えていないので、よりダイナミックな発展を求めるロシア極東人を納得させることはできないだろう。ロシア政治の地方分権化から中央集権化へという、歴史上何度も繰り返されてきた転換の現代版は、ロシアの極東空間を組織する別のモデル探しを促進するだけでは済まないだろう。リージョンを合併・巨大化または細分化することは、地方当局による正統化作業、歴史的な資源の利用法、地域アイデンティティの動員方法を変化させるだろう。この地域

アイデンティティにおいては、極東の特質を伝統的に保ちつつも、「单一にして不可分な」国家という全ロシア的な文脈が主導的な役割を果たすだろう。

本稿は、北海道大学スラブ研究センターの2007年度外国人研究員（客員教授）であるアナトリー・レムニヨフ・オムスク大学教授が、『近現代東北アジア地域史研究会ニュースレター』の求めに応じて書き下ろしたものである。露語からの和訳は、北海道大学文学研究科院生・麻田雅文が行い、松里公孝・スラブ研究センター教授が点検した。和訳の際に、歴史上の人物に役職名を付加する、また逆にあまりに些細な情報（地方史家の名前の列挙など）は削るなどの工夫を行なったが、煩瑣を避けるためにいちいち表示しなかった。また、原文にはロシア極東の行政における諸官庁間の権限争いについての興味深い分析が含まれていたが、紙幅の制限と、「こんにちの歴史意識におけるロシア極東」という編集部が求めるフォーカスから離れていることから、割愛せざるを得なかった。原文に興味がある読者は松里まで一報されたい（kim@slav.hokudai.ac.jp）。

註

- (1) Steven Kotkin and David Wolff, eds., *Rediscovering Russia in Asia. Siberia and the Russian Far East* (New York and London, 1995)
- (2) Высоков М.С., Ульянникова Ю.В. Вновь открывая российскую Азию: Сибирь и Дальний Восток. Нью-Йорк; Лондон, 1995. – 356 с. // Краеведческий бюллетень. Южно-Сахалинск, 2001. № 1. С. 145.
- (3) Галлямова Л.И. Российский Дальний Восток в контексте новейшей отечественной историографии. Картина последний лет // Россия и АТР. 2006. № 2. С. 105. この論文はテーマに関連した幅広い文献リストを含んでいる。
- (4) История Дальнего Востока России с сопредельных стран Азиатско-Тихоокеанского региона с XVIII в. до 1938 г. (Тематика исследований по материалам РГИА ДВ с 1994 по 2002 гг.). Справочник. Владивосток, 2004.
- (5) Дальний Восток России в материалах законодательства (1856-1895 гг.) (5 выпусков). [訳注：これ以下の史料集のタイトルは、レムニヨフが研究動向を示すために列挙したに過ぎないので、煩瑣を避けるために書誌情報はつけない。]
- (6) Дальний Восток России: из истории системы управления: к 115-летию образования Приамурского генерал-губернаторства.
- (7) Маршрут для цесаревича: документы и материалы.
- (8) Маршрутами губернаторов.
- (9) Порто-франко на Дальнем Востоке.
- (10) Из истории востоковедения на Российском Дальнем Востоке, 1899-1937 гг.
- (11) Корейцы на российском Дальнем Востоке (вторая половина XIX - начало XX вв.).
- (12) Муравьев-Амурский. Возвращение на пьедестал. Хабаровск, 1996. 注目に値するのは、H.H. ムラヴィヨフ・アムールスキイについての И.П. バルスコフの著名な本が、現職のハバロフスク州知事 В.И. イシャーエフの序文つきで1999年に出版されたことだ。イシャーエフはこう書いている。「沿アムール地方のロシアへの併合に向けた国家政策の主導者は、総督 H.H. ムラヴィヨフ・アム

ールスキーをリーダーとする、東シベリアの軍事官僚や商人たちであった。彼らは、太平洋における事業に精通し、それに多大な関心を持っていたのである。ツァーリ政府が対欧州政策を優先して極東をないがしろにするのを総督とその支持者たちは承服しなかつた」。イシャーエフ知事は、Н.Л. ゴンダッチ・プリアムール総督と同じく Н.И. グロデコフ総督について Н.И. ドゥビニナが書いた本の冒頭にも「祝福の辞」を献じた。

- (13) *Востриков Л.А., Востоков З.В.* Хабаровск и хабаровчане. Очерки о прошлом. Хабаровск, 1991; *Дубинина Н.И.* Приамурский генерал-губернатор Н. Л. Гондатти. Хабаровск, 1997; *она же.* Приамурский генерал-губернатор Н.И. Гродеков. Хабаровск, 2002; *Матханова Н.П.* Генерал-губернаторы Восточной Сибири. Новосибирск, 1998; Губернаторы Сахалина. Южно-Сахалинск, 2000; *Абелецев В.Н.* Амурские губернаторы. 1856-1917 гг.: сборник документов и материалов. Благовещенск, 2006.
- (14) *Троицкая Н.А.* Тоска о порто-франко: Из истории таможенной политики на русском дальнем Востоке // Россия и АТР. 1995. № 4.
- (15) *Сергеев О.И., Лазарева С.И., Тригуб Г.Я.* Местное самоуправление на Дальнем Востоке России во второй половине XIX – начале XX в. Владивосток, 2002.
- (16) *Ремнев А.В.* Россия Дальнего Востока. Имперская география власти XIX – начала XX веков. Омск, 2004.
- (17) このことはサハリン島にとってとりわけ重要である。См.: Ульянникова Ю.В. Аванторист, чиновник, подвижник: к вопросу о формировании регионального самосознания на Сахалине // Ab Imperio. 2000. № 3-4; Давыденко И.А. Образ Сахалина в материалах российских исследователей Дальнего Востока // Краеведческий бюллетень. Южно-Сахалинск, 2001. № 1.
- (18) 訳注：これはアレクセイ・ミラーが19世紀の支配的な民族理論から抽出した概念で、東スラブ諸族は単一の超民族としての「ロシア人」であり、大ロシア、小ロシア、ベラルースの諸族はその支族に過ぎないとする考え方である。Alexei Miller, *The Ukrainian Question. The Russian Empire and Nationalism in the Nineteenth Century* (CEU Press, Budapest, 2003). 極東に移住したウクライナ人が言語などの特異性を急速に失って大ロシア化していくこと、また当局がそれを予見して、極東ではウクライナ問題を取りざたしなかつたことをレムニヨフは指している。
- (19) Восточное обозрение. 1886. 19 июня; 1889. 27 авг.

(アナトリー レムニヨフ：北海道大学スラブ研究センター)

(あさだ まさふみ：北海道大学文学研究科博士後期課程)

(まつざと きみたか：北海道大学スラブ研究センター)